
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 46

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 901. 閃きを書き留める大切さ
- 902. 物理学ジャーナルに寄稿された論文からの大きな学び
- 903. 発達の本質にある「差異」と「反復」
- 904. 睡眠と夢
- 905. 批判と心理的な投影の関係
- 906. 旅日記に対する思い
- 907. 【ウィーン訪問記】オーストリアへの出発に向けて
- 908. 【ウィーン訪問記】アムステルダム国際空港のカフェで:波と海
- 909. 【ウィーン訪問記】ウィーン国際空港に到着して
- 910. 【ウィーン訪問記】モーツァルトの魂が宿る肉筆から
- 911. 【ウィーン訪問記】世田谷公園とベートーヴェン記念館での体験
- 912. 【ウィーン訪問記】ベートーヴェン記念館(ハイリゲンシュタットの遺書の家)での必然
- 913. 【ウィーン訪問記】シューベルト記念館とフロイト博物館での体験
- 914. 【ウィーン訪問記】静寂さに宿る何か:アルベルティーナ美術館にて
- 915. 【ウィーン訪問記】「ベートーヴェン記念館(パスクアラティハウス)」の記憶から
- 916. 【ザルツブルグ訪問記】モーツァルトの生誕地ザルツブルグに到着して
- 917. 【ザルツブルグ訪問記】ザルツァハ川の橋の上で:文化的体験の意味と意義
- 918. 【ザルツブルグ訪問記】シナジェティクスの提唱者ハーマン・ハーケン教授との出会い
- 919. 【ザルツブルグ訪問記】学会の初日を振り返って
- 920. 【ザルツブルグ訪問記】アルプス山脈を越え、太陽を超えて

901. 関きを書き留める大切さ

今日は午前中に、計画通りに文献調査を進めることができた。具体的には、現在の研究で用いている、二つのシステムのシンクロナイゼーションを分析する「交差再帰定量化解析(CRQA)」に関する論文と、CRQAの母体である「再帰定量化解析(RQA)」に関する論文を五本ほど読むことができた。五つの論文のうち、二つが人間発達に関するものであり、残りの三つは物理学に関するものである。最初の二つの論文は、どちらも私の研究に直接的に役に立つ情報が盛り込まれていた。

一つ目の論文は、人間のコミュニケーションにおいて、言葉の使用、表情やジェスチャーといった要素が、コミュニケーションの進行に応じてどのようにシンクロナイゼーションを起こすのかを調査したものである。もう一方の論文は、ラポールの調査と言っても過言ではなく、セラピストとクライアントの非言語的な行動(例:視線、相づち、発話のリズム)がどのようなシンクロナイゼーションを起こしているのかを調査するものだ。どちらの論文も内容として非常に興味深いのは確かであったが、私が最も関心を持ったのは、そうした研究の内容にはなかった。私が最も関心を持ったのは、CRQAを研究に用いる際のアプローチだった。

現時点において、私がCRQAを用いる際のアプローチは、プログラミング言語のRを活用して、CRQAをデータに適用し、出力された複数の指標の意味を解釈することであった。しかし、論文に分析結果の文章を執筆している最中に、果たしてそれらの指標を全て解釈することが、自分のリサーチクエストに正しく答えることにつながっているのだろうか、という疑問を抱くようになっていた。

私のリサーチクエストの一つは、非常にシンプルであり、成人のオンライン学習において、教室内での教師と学習者の発話行動、もしくは、発話構造がシンクロナイゼーションを起こしていると言えるのかどうか、起こしていると言えるのであれば、全五回のクラスを通じて、シンクロナイゼーションの度合いはどのように発達していたのか、というものである。

このリサーチクエストに答えるためには、CRQAが出力する複数の指標を全て取り上げる必要はないのではないか、ということを読者の論文を読みながら改めて気づかされた。仮に、今回の研究におけるシンクロナイゼーションを、教師と学習者間の発話行動のマッチング(例:「オープンクエスト」と「自発的回答」の組み合わせ)とみなすか、教師の発話構造のレベルと学習者の発話構

造のレベルのマッチングとみなせば、マッチングの度合いを示す指標だけに焦点を絞った方が良
いと判断した。

その次に、シンクロナイズーションが起こっているのかどうかを客観的に判断するための基準か、も
しくは何かしらの方法が必要になる。この点については、論文アドバイザーのサスキア・クネン先生
からも指摘があったものであり、同時に、私も気にかかっていた論点であった。それに対して、それ
らの二つの論文を読んでいく中で、閃くものがあった。シンクロナイズーションが生じているのかどう
かの判断は、意外と簡単であることに気づいたのだ。

具体的には、二つのシステムの挙動がどれだけ同じパターンを持っているのかを示す「反復率
(recurrence rate: RR)」に着目し、全五回にわたる教師と学習者の229回の相互作用の全てに対し
て、RRを算出し、一つの時系列データを作成する。つまり、縦軸にRRを取り、横軸に相互作用の回
数を0から229で取る。容易に推測できるのは、それらの時系列データは、線形的なものではなく非
線形的なものであり、変動性を多分に含んだものになるだろう。

この変動性が有意義なものだということを検証するために、統計学の古典的な検定手法を用いれ
ば良いことに気づいたのだ。その際に、RRに関するデータをシャッフルし、ランダムに生成された時
系列データをもう一つ作る。あるいは、一つではなく、「複雑性と人間発達」のコースで学習した「モ
ンテカルロ法」を用いて、RRに関するランダムな時系列データを1000個ほど生成し、それらと実際
の時系列データを比較する形で統計検定を行うのだ。

要するに、RRに関する1000個ほどの擬似的な非線形時系列データと実際の非線形時系列データ
を照らし合わせ、実際のデータが有意義であるかを検証するのだ。その時、帰無仮説として、実際
の時系列データが示す現象は確率的に生じたものであるという仮説を立て、それが棄却されるの
かどうかをモンテカルロ法を用いて検証したい。

仮にその仮説が棄却されれば、実際の時系列データが示す現象は、確率的に生じたシンクロナイ
ゼーションではなく、有意義なシンクロナイズーションだということが言えるだろう。もしそのように言
えたのであれば、RRの時系列データのグラフを参照しながら、どのような発達の推移を辿っている
のかを分析したい。

今回の研究で適用するかどうかは別にして、シンクロナイゼーションがどの種類のノイズを発しているのかを検証するために、「トレンド除去変動解析(DFA)」などを適用するのはとても面白そうだ。五つのうち、最初の二つの論文を読みながら、そのような考えが生まれることになった。

論文や書籍を読んで閃いた事柄は、それが正しいのか誤っているのかにかかわらず、とりあえず一度書き出してみることは非常に大切だと改めて思う。仮に見当違いなことを書き留めていたとしても、後々に読み返してみたときに、見当違いの箇所に気づき、そこから筋の良い別のアイデアが生まれることが多々あるのだ。2017/4/1

902. 物理学ジャーナルに寄稿された論文からの大きな学び

今日の午前中に読み進めていた五つの論文のうち、三つの論文は物理学のジャーナルに寄稿されたものだった。いずれの論文にも数式が絡むのだが、それらはそれほど難解な数式ではなく、また論文のページ数も長くて七ページほどであったから、集中してそれらの論文を読み通すことができた。とりわけ、“Recurrence Quantification Analysis of the Logistic Equation with Transients (1996)”という論文には大変感化された。読了後、論文の冒頭ページの余白部分に、「この論文は、システムの挙動が見せる反復パターンの構造を特定することに関して、大変面白いことを述べている」というメモを残していた。

そうなのだ、この論文に対して最も感銘を受けたのは、「再帰定量化解析(RQA)」を用いれば、システムの挙動の反復度合いを分析するだけではなく、反復パターンの構造的推移を捉えることができるということであった。

この論文では、ダイナミックシステムの最も代表的な例である、ロジスティック写像——高校一年生で学習する最もシンプルな漸化式——を取り上げている。ロジスティック写像の方程式のパラメータを特定の値に設定すれば、それはカオス的な振る舞いを見せる。カオス的な振る舞いの中に、実際は、「バイファケーション」と呼ばれる分岐点がある。バイファケーションは、カオス的な振る舞いを見せるシステムの構造的推移が起こる地点だとみなすことができる。

人間の発達においては、発達段階が向上する地点というのは、バイファケーションだとみなすことができる。この論文を読んで非常に興味深かったのは、ロジスティック写像に対して、RQAを適用し、

RQAが出力する結果と実際のバイファケーションが対応しているのかどうかを調査し、実際にそれらが対応していたことだった。さらには、RQAとの比較の観点から、平均や標準分散などの古典的な統計的尺度を用いて、バイファケーションとの対応を調査していた。結果として明らかになったのは、平均や標準分散を用いてしまうと、バイファケーションの地点を適切に捉えることはできないということであった。

一方、RQAを用いれば、正確にその地点を捉えることができるということが調査から明らかになった。つまり、RQAを用いれば、カオス的な振る舞いを見せるシステムの構造的な変化の地点を的確に捉えることができるのだ。

これまで少しずつRQAに関する論文や専門書を読んできたが、RQAの用途は、反復パターンの度合いを分析するものだという認識が強く私の頭の中にあった。しかし、そうした用途を超えて、RQAを用いれば、反復パターンの構造的変化を捉えることができるのだ。

人間の発達現象のように、カオス的な振る舞いを見せるダイナミックシステムの変化を分析する際に、RQAは非常に有益な手法の一つである、と考えを新たにすることができた。来週の木曜日から始まる、ザルツブルグでの非線形ダイナミクスに関する学会においても、RQAが取り上げられることになるだろう。学会に参加することを通じて、RQAの用途や応用可能性についてより理解を深めていきたいと思う。自分が発達現象の研究に適用する手法に関する論文が、仮に物理学のジャーナルに投稿されているものだったとしても、身構える必要はそれほどないのだと最近感じるようになった。

それよりもむしろ、そうした論文を積極的に読んでいかなければ、ダイナミックシステムアプローチや非線形ダイナミクスの手法に関する深い理解は一切得られないのだと思う。2017/4/1

【追記】

上記二つの日記を合わせて読んでみると、RQAという手法の魅力に改めて気付く。現在取り掛かっている研究では、トレンド除去変動解析と同様に、システムの挙動が持つフラクタル次元を明らかにすることのできる「標準分散解析」という手法を用いている。今後の研究では、ぜひともRQAを活用したい。発達が起こるバイファケーション地点を特定することや、システムの反復的な挙動の度合い

を分析することにRQAは力を発揮する。この手法を用いて、作曲技術の発達に関する研究を行っていきたいと思う。フローニンゲン:2018/5/4(金)09:54

903. 発達の本質にある「差異」と「反復」

いよいよ明後日から、一週間ほどのオーストリア旅行が始まる。出発前の気持ちとしては、今年の夏の欧州小旅行と同様に、そこに何が待っているのかに対する楽しみと非常に静かな気持ちが隣り合わせになっている。下手に達観しているわけではないが、自分が訪れたことのない土地は、常に想定範囲内かつ範囲外の出来事と遭遇することを知っているがゆえに、そのような気持ちになっているのかもしれない。私はできるだけ、現在の自分の認識の枠組みの範疇を超えた出来事に対して、心を動かしたいと思う。

今回、ウィーンとザルツブルグへ滞在する期間の中で、今の自分をより深めてくれるような現象と必ず出会うことになるだろう。それを逃さないことが大切だ。そのようなことを思いながら、明後日の出発に向けて、最後の食料の買い足しに出かけた。近くのスーパーに向かって歩いている最中に、突如として、自分の研究に関するより適切なリサーチクエスチョンが閃いた。

今日の午前中からスーパーに出かける前にかけて、研究のある一つの論点に対してずっと思考を巡らせていたためか、降って湧いたように筋の良さそうなアイデアが閃いたのだ。それは、研究対象である教師と学習間における発話構造の複雑性に関するシンクロナイゼーションの問題だ。突如として閃いたアイデアをもとにすれば、今直面している問題を解決することができると直感的にわかった。もちろん、その解決策を実施する前に、あれこれと小さなことを確認しておく必要がある。

そうした小さな確認事項が何なのかについて、スーパーの店内を歩きながらあれこれと考え、先ほどの入浴中にも色々と考えを巡らせていた。それらの細かな点を詰めることは当然大事であり、それらには閃いた解決策を実行できるのか否かを左右する点が混じっていることにも気づいた。その点を詰めるために、夕食後からは、プログラミング言語のRをいじりながら、その点について検証をしておきたい。午前中にインターネット上で発見した資料に沿いながら、実際に手を動かす形でRを用いた検証をしておきたいと思う。

結局、オーストリアへ旅行に出かける直前まで、研究に打ち込むことになりそうだ。オーストリアに滞在している最中においても、研究が頭から離れることはないだろうが、あえて研究から離れるような意識を持ちたいと思う。対象から一度離れることは、再びその対象に戻ってきた時に、これまで以上に深く対象の奥へと入り込むことを可能にするからだ。可能かどうか分からないが、ウィーンとザルツブルグにいる間は、できる限り研究から離れたいと思う。

そのようなことを思いながら、昼食後に目を通していた論文について少しばかり書き留めておきたいと思った。この論文は、ダイナミックシステムアプローチを発達研究に適用した先駆者の一人であるアラン・フォーゲルが執筆したものだ。エスター・セレン、リンダ・スミス、ポール・ヴァン・ギアート、マーク・レヴィスらと同様に、ダイナミックシステムアプローチを活用した発達研究に関して、アラン・フォーゲルが果たした功績は大きい。

この論文の中には、発達現象のプロセスをつかむための研究デザインに関する説明、ダイナミックシステムの発達プロセスが持つ三つのレベルに関する説明、複雑な発達現象に対して観察者が与える影響に関する説明など、再度読み返しておきたい論点が多くある。そうした論点以外に、最も私が気になったのは、グレゴリー・ベイトソンが残した「差異は差異を生む」あるいは「差異を生むのは差異である」という言葉であった。この論文の中でも言及されているように、システムの差異が持つパターンを認識するのは、観察者である私たちである。

そうしたパターンは、まさにこれまでのシステムの特性と異なるがゆえに、私たちが認識できるものと言えるだろう。だが、システムは、私たちが認識できないような差異を常に産みながら変化しているのも事実だ。一つとして同じ差異は存在せず、システムの変化に応じて、常に新たな差異が生まれているというのはとても興味深い。そして何より、差異を生み出すメカニズムが反復的だという点も面白いだろう。

反復的に差異を生み出しながらも、その差異はこれまでの差異とは異なるのだ。この現象は、私を捉えてやまないものがある。端的に述べれば、「差異」と「反復」という現象は、ダイナミックシステムの本質的な要素であり、それらは多分に哲学的な要素を持っているのだ。そうした哲学的な要素が、私を強く引きつけているのだと思う。

そのようなことに思いを巡らせていると、ちょうど昨年の夏に購入した、フランスの哲学者ジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”が本棚にあることを思い出した。すぐさま本棚に駆け寄り、本書を手にとって中身を眺めると、当時の私にとってこの書籍は難解であり、少しばかり線が引いてあったり、少々書き込みがあったりするぐらいであった。

だが、当時の私ですらも、発達現象の本質には、差異と反復があるということに気づいていたようなのだ。そうした関心から本書を購入していたことを思い出した。少しばかり本書の中身に目を通すと、キルケゴールやニーチェらが反復に関する哲学的考察を行っていたことに気づく。

一方、差異に関しては、プラトン、アリストテレス、ドゥンス・スコトゥス、スピノザ、ニーチェ、ヘーゲル、ライプニッツたちが哲学的な考察を展開していることを知った。過去の偉大な哲学者たちがこぞって差異と反復に関する探究を行っていたことを見るにつけ、より一層、それらの現象に対する探究を哲学的な観点から深めていきたいと思うようになった。

差異と反復に関する探究は、発達研究に不可欠な思想を醸成し、発達現象に対するより深い思索を可能にすることにつながると考えて仕方ない。本書に関しては、システム科学とネットワーク科学の書籍を一読し終え、オーストリアから戻って来て以降、毎日一つずつ章を読み進めていきたいと思う。

書斎の窓から見える赤紫色の美しい夕日を眺めながら、本書と出会えたこと、そして本書が今この瞬間に自分の手元にあることが幸運に思えてならなかった。2017/4/1

【追記】

グレゴリー・ベイトソンが残した「差異は差異を生む」という言葉が今の自分に染み込んでくる。昨日の自分と今日の自分の間に歴然と存在する小さな差異。日々は規律によって組成された反復に基づいた形で過ぎていくが、そうした反復が何ものにも還元できない固有の差異を生み出していく。そのように考えると、反復そのもののの中に内在的な差異が宿っているように思えてくる。反復とは差異であり、差異とは反復なのかもしれない。ジル・ドゥルーズの“Difference and Repetition (1968)”という書籍は極めて優れたものであるがゆえに、今年中にまた再読をするかもしれない。フローニンゲン:2018/5/4(金)10:03

私は、毎日睡眠時間をしっかり確保している方だと思う。夜の十時には就寝し、そこから少なくとも八時間は睡眠時間を取っている。また、午後二時あたりに短い昼寝をするというのも、ここ十年間の習慣になっている。それらの睡眠は、心身の回復に不可欠なものであり、良質な睡眠を取ることは、日々の仕事や生活にリズムをもたらす。

ここ数日間は、普段より少し多めの睡眠時間を取っていたような気がする。日々の睡眠時間は、就寝に向かうまでの一日の中で、どのような仕事をどれだけ行ったかに比例しているかのようである。特に、その日において、読むことや書くことが多ければ多いほど、より長い睡眠を取るような傾向にある。これはとても面白い現象だと思う。

その日において、文書を読むことが多ければ多いほど、脳を含め、私の中で整理しなければならない情報が増え、そうした作業を担ってくれるのは睡眠であるために、睡眠時間が長くなるのは理解できる。一方、書くという行為は本来、自分の内側の思考や感情などを整理する性質を持っているものであり、そうでありながらも、書く行為に没頭した後も睡眠時間が増えるというのは面白い現象だと思う。これはおそらく、書くという行為について、私がまだ見落としている点があるからだろう。

書くという行為には、確かに内面で湧き上がる現象を整理する性質がありながらも、同時に、内面に新たな現象を生じさせる刺激のような性質も持っている気がしてならない。そのため、書くという行為に没頭すればするほど、内面の現象が整理されるということが起きていながらも、内面に新たな現象が生じるがゆえに、それを整理するために睡眠が必要になるのだと思う。

日々の生活の中で、文章を読むことと書くことが常態化しているため、昨日においては、それほど多くの文章を読んだり書いたりしたという意識はほとんどなかった。だが、冷静に昨日を振り返ってみると、確かに昨日も諸々の論文に目を通していたし、それなりの量の文章を書いていることに気づいた。

昨夜の睡眠時間は比較的長かったが、昨日の仕事に対して没頭しすぎていたかという、全くそうではない。無理なく、一切の事柄が全て日々の習慣的な行為として取りなされていた。大量の文書を読んだり書いたりすることを行い、長い睡眠時間を取るということを繰り返していると、意識空間の

中に別種の筋力のようなものが身についてくる実感がある。睡眠によって回復した筋力が、次の日の仕事を推進してくれる。その際に、新たな筋力は昨日の筋力とは異なるものに変化しており、その強度が徐々に増しているのを最近実感するようになった。どのような夢を見たのかということを観察するだけでなく、単純に、どれほどの時間睡眠を取っていたのかを観察すると、昨日の行動全体を改めて振り返ることにつながるように思える。

実は昨夜の夢も、再び飛行に関するものであった。体育館のような場所で、旧友たちと運動をしている最中、突如として私の身体が浮かび上がった。その体育館らしき建物は変わった作りになっており、天井が信じられないほど高かった。私は、その天井まで浮かび上がり、もはや旧友たちが私の姿を確認できないほどの場所にいた。

その時、その場所の空気が淀んでおり、あまり呼吸をしたくないような印象を私に与えていた。実は昨夜の就寝前に、最近の夢の中では自分の暴力性を象徴するような事柄が見られない、と思っていた。すると、天井に飛び上がる前の場面を思い返してみると、体育館の中でスポーツを行っていた最中に、その場を取り仕切っている教師らしき人物に対して、自分の攻撃性を発露させるようなことを行っていたのを思い出した。

攻撃性を発揮した後に、身体の上昇が待っていたのだ。昨夜の夢を回想しながら、書斎の窓から外を見ると、少しばかり霧がかかっていた。それでも朝日が差し込み、外の世界はなんとなくいつもと違って見えた。2017/4/2

905. 批判と心理的な投影の関係

今朝起床直後、歯を磨きながら、心理的な投影現象について考えさせられていた。というのも、私は特定の個人を攻撃することはあまりないのだが、より大きな集合的なものに対して攻撃するような考えを持つことが頻繁にあることに気づいたからである。

これは前々から薄々気づいていたのだが、思考の矛先を集合的なものへの批判に向けることがよくある。この時、批判の対象が何らかの組織であれ社会であれ、それらの実態が定かでないにもかかわらず、自分の頭の中でそれらを一つの総体として構成し、自ら生み出した構築物に対して批判していることがわかる。そして、そうした批判は、多分に自らの内側の問題が投影された形で現れてく

ることが多いように思える。例えば、「人々」という総体を頭の中で構築し、人々の無知さや未成熟ぶりを批判する際に、そこには、私が毎日自分に対して行なっている、自分の無知さや未成熟ぶりに対する反省が投影されているような気がしてならないのだ。

また、生きることに関する激しい理想を掲げながら、その理想にそぐわない自分に対して絶えず批判をすることが、そのまま他者への批判という心理的な投影につながっているような気がする。ここには少し難しい問題が潜んでいるように思える。

往々にして、何かを批判する際に、それが批判のための批判に終始してしまうことがある。そこには、批判という行為を経た後、何らかの実践的営みが生まれることはない。批判の裏に心理的な投影があったとしても、批判することを安易に退けてしまうことは望ましくないと思う自分がいる。というのも、批判という行為には、それが集合的なものに向けられようが個人に向けられようが、根本的には自己批判につながるような本質を持っているような気がするからである。

批判の最低限の条件(作法)として、他者批判と自己批判が表裏一体になっている必要があると思うのだ。他者批判と自己批判が密接につながっているがゆえに、批判の矛先を他者に向けた瞬間に、それは自己を批判していることに他ならず、そこから批判内容を超えようとするような行為や行動が自己の内側に生まれてくるのではないかと思う。

発達心理学の世界において、私たちが発達する際には、健全な自己批判がつきものであると指摘されているように、自己批判がなければそこからの発展もないだろう。心理的な投影が多分に含まれた批判は、こうした発達衝動に基づいたものなのかもしれない。そのようなことを思わされる。

今日は午前中に、主に二つのことを行いたいと思う。一つ目は、フローニンゲン大学の二年目に所属することを希望している、「実証的教育学」のプログラムに応募するための書類を提出することである。幸いにも、私はすでにフローニンゲン大学の発達心理学科に在籍しており、大学の組織編成上、教育学科も同じ傘下にあり、TOEFLの試験結果や統計学の知識に関する証明書類などを再度提出する必要はない、という連絡をアドミッションから昨日得た。

私が提出すれば良いのは、二通の推薦状と志望動機書、そしてCVだろう。推薦状と志望動機書はすでに作成済みであり、志望動機書を最終確認し、CVをアップデートしたところで、必要な書類を今日の午前中にアドミッションに送りたい。

今回の実証的教育プログラムへの応募に関しては、面接があるようなので、後日面接日に関する連絡が来るようだ。アドミッションへ必要な書類を送ったら、次に取り掛かりたいのは、「交差再帰定量化解析(CRQA)」に関するRのプログラミングコードを見直すことである。昨日偶然にも、インターネット上でCRQAに関してうまくまとまっている資料を発見し、自分が現在持っている課題を解決するヒントが盛り込まれていることを感じたため、今日はその資料を最初から順を追って読み進めたいと思う。この資料が、今の私の研究上の課題を突破する起爆剤になってくれれば有り難い。2017/4/2

906. 旅日記に対する思い

昨夜就寝前に、書斎の電気を消そうと思った瞬間に本棚に目がいった。すると、辻邦生先生が書き残した旅行記の背表紙が、私の目に飛び込んできた。私は、おもむろにその旅行記に手を伸ばした。

これまで何度か、自分にとって日記を読むこと・書くことの持つ意味について書き留めていたように思う。私は時折、何かのきっかけで辻先生や森有正先生が書き残した日記を手取るようなことがある。昨夜もまさにそのような出来事だった。

いつもであれば、辻先生や森先生の読みかけの日記を手に取り、その続きから読み始める。しかし、昨夜はなぜだか、これまでじっくりと読んだことのなかった二冊の日記に手が伸びたのだ。それは、『詩への旅 詩からの旅』『時の終わりへの旅』という二冊の旅行記だった。私がこれまで熱心に読み進めていた辻先生の日記は、『パリの手記』という全五巻にわたる作品だ。

全五巻に及ぶそれらの一連の日記には、辻先生が初めてパリに渡り、小説家としての活動の意味を掴むためのプロセスが克明に記されている。昨夜私が手に取ったのは、『パリの手記』からおおよそ十年後に執筆された旅行記だった。

私はちょうど明日からオーストリアへの小旅行に出かけることになっている。旅に出かける直前に、偶然ながら辻先生の旅行記を手にとったのは何かの必然だろう。辻先生の旅行記を紐解いてみると、日記という文体でしか伝えられないことが伝わってくるような感覚に襲われた。日記には、ノンフィクションとフィクションが入り混じり、書き手の実存性や思想が滲み出てくるような独特な特徴がある。私も辻先生と同様に、書くことに対する抑えがたい衝動を常に持っており、書くことを通じてしかものを考えられない特性を持っているように思う。

辻先生がまさに「書きながら考える」ことを通じて日々を過ごしていたのと同様に、私も「書きながら考え、考えながら書き、書きながら生きる」ということを継続させていきたいと強く思う。明日からのオーストリアへの小旅行の最中も、ぜひとも日記を書くことを継続させたいと思う。

ただし、単純にウィーンやザルツブルグに関する事実を記すのではなく、私がその地で何を考え、何を感じたのかという内面の機微を書き留めておくことが大事だ。旅先でしか得られない思考・感覚・感動などを自分の言葉として書き残しておくのだ。

新たな土地で自分の内面にもたらされる促しに応じるように、呼びかけに応じて発せられる内面の声に耳を傾けたい。その声を、私は自分の言葉として書き記しておきたいと思うのだ。2017/4/2

【追記】

偶然にも昨日、知人の方と話している最中に、お互いに辻邦生先生の作品に惹かれるものがあるということがわかった。厳密には、辻先生の作品のみならず、先生の生き方そのものに強く打たれるものをお互いに感じていることがわかったのだ。辻先生はこの世界の美的なものを絶えず深く愛して日々を過ごしていた。その姿勢に私は感銘を受け、大きな共感の念を持つ。

ちょうど来週末に上の階に住むピアニストの友人と会う際に、貸していた辻先生の日記を返してもらう。この夏、私は再び先生の『パリの手記』を最初から読み返したいと思う。今から60年以上前に、日本からフランスへ行くために乗船した船での初日の出来事からこの手記は始まる。そこから四年間のパリでの滞在の足跡がこの手記に書き残されている。

船旅への憧れと日々の生活の中に絶えず美的なものを見出していくことへの衝動が高まる。私は数年以内に必ず世界を一周する船旅に出かけたいと思う。そこで見たもの・感じたものの全てを、日記・曲・デッサンとして形にしていく。その日の実現に向けて、今日という大切な一日がある。フローニンゲン:2018/5/4(金)10:03

907. 【ウィーン訪問記】オーストリアへの出発に向けて

いよいよ出発の日がやってきた。オーストリアへ一週間ほど滞在する小旅行の出発の日がついにやってきた。

旅をする日というのは、幾つになってもどこか私の心を踊らせるような働きを持っている。実際に、昨夜も夜中の三時あたりに一度目を覚ましてしまった。結局今日は、予定よりも少しばかり早い時間に起床することになったのだ。こうしたことから、私がこの旅に対して期待感を抱いていることがわかる。そうした気持ちを顕在意識の中で隠すことはできても、無意識の中で隠すことはできなかったようだ。それが今朝の目覚めに現れている。

起床直後、出発直前に最後の日記を書き留めておこうと思い、書斎の机の前に座った。出発当日の朝はとても静かだ。普段通りに、書斎の窓から見える外の世界から、小鳥の鳴き声が私の耳に届けられた。朝日を待つ早朝の闇、あたりの静けさ、小鳥の鳴き声、そうした外部環境はいつもと何ら変わることがない。いつもと異なるものは、私の内面世界だ。込み上げてくる旅に対する期待感を落ち着かせるような静かな感覚が内側を流れている。

新たな土地に行く時は、決まっていつもこのような不思議な感覚が内側を流れる。去年の欧州小旅行の時もそうであったし、デン・ハーグへの日帰り旅行の時もそうだった。また、オランダに向けて日本を出発したあの朝もそうだった。今、この瞬間に流れている期待感の粒子だけを取り出したような静かな感覚は、私にとって、出発を知らせる本質的な感覚だと言っていいのかもしれない。

何かに向けて出発する時、この感覚がいつも私の内側に顔を覗かせる。これは確かに出発を知らせる感覚であると同時に、自分がもはや出発したことを知らせるものだとも思うのだ。私たちが出発を思う時、私たちはもはやすでに出発しているのではないだろうか。そのようなことを考えると、この感覚は、出発を知らせる呼び鈴ではなく、出発したことを祝す合図とみなしてよいのかもしれない。

出発したことを祝す感覚に包まれながら、私は旅行用のスーツケースに最後の荷物を積み込んだ。出発を祝う感覚を追いかける形で、もう少ししたら、ゆっくりと自宅を出発したいと思う。自分の全ての感覚を開きながら、ウィーンとザルツブルグの街に溶け込みたいと思う。出発したことを真に祝うのは、ウィーンとザルツブルグの滞在を通じて、自分の内側に変化が見られた時なのかもしれない。その瞬間に向けて、今から出発したいと思う。2017/4/3

908. 【ウィーン訪問記】アムステルダム国際空港のカフェで:波と海

予定よりも少し早く自宅を出発し、アムステルダム国際空港に到着した。セキュリティーを通過し、搭乗ゲート近くのカフェで今この文章を書いている。

自宅から空港までの間に、何か大きな気づきや発見があったわけでは決していない。しかし、なぜだかパソコンを立ち上げ、日本語の文章を綴っている自分がいる。

六年前に米国に留学して以降、日本国外にいる間は、外出中に日本語の文章を読み書きしないような習慣があった。これは幾分謎めいた習慣なのだが、自宅やホテルなどの滞在先にいる間以外は、外で日本語を読み書きすることを避ける傾向があったのだ。

表面的な理由として、外出先で日本語空間に思考が移行してしまうと、突然の時に他の外国語空間に思考を変える一瞬が命乗りなってしまうかもしれない、というような防衛反応が関係しているように思う。もちろん、これまで海外生活において、身の危険を感じたことは一度もないのだが、万が一に備えて、出先では常に英語空間に留まっているような無意識的な働きがある。

だが、今このようにして、アムステルダム国際空港で日本語を書いていることからわかるように、日本語と外国語の使用に関して、少しばかり私の中で変化があったようなのだ。これは国外で暮らすことからの慣れが生み出したものなのかもしれないし、直ちに日本語空間から英語空間に移行できるというような驕りのようなものがそうさせているのかもしれない。

この現象のさらに奥には、私の言語感覚と言語能力に関して、まだ明確な言葉を与えられないような現象が横たわっている気がしてならない。今少しだけ言えることがあるとすれば、ようやく日本語への固着から解放されつつあるように思うということだ。とりわけ、外国語の中でも英語がようやく自

分の感覚や存在に流入するようになっていたのを実感する。ここに至るまでに五年の歳月がかかった。

昨日の午後から夜にかけて、友人と対話をした後に気づいたのは、日本語にせよ英語にせよ、書き言葉だけではなく、とりわけ自分の話し言葉の能力も高めていく必要があるということだった。日本語と英語という二つの言語がともに、自分の存在に立脚した深層的な感覚から生み出されるようになってきたことは喜ばしいことなのだが、それらの言語の使用に関して、道半ばであるという思いが尽きない。それほどまでに、言語を真の意味で使用するということは難しいのだ。

ウィーンに到着するまで三時間ほどとなった。ウィーン行きの搭乗まで一時間を切った。それなのに、私の内側は、一切の波が消失した大海のようである。自宅を出発した時の期待感と静けさの感覚を超えて、今の私の心の状態は恐ろしいほどの感覚無だ。ウィーンへの期待感もいつの間にやら消え失せ、私は、カフェの机の上に置かれたグラスと同様に、ただここにある。

飛行機の搭乗を待つ無数の人たちが見える。彼らの一挙手一投足が、打ち寄せては消える波のように見える。それらの全てが、波を生み出す海そのものに溶け込んでしまうかのようだ。

人間というのは毎日このように、打ち寄せては消える波のように振る舞い、波を生み出す大海の中で常に存在しているのだ、と思わずにはいられない。パソコンを開く前に書き留めておこうと思ったこととは全く異なることを自分が書き留めていることに気づいた。我に返った瞬間、ウィーン行きの搭乗が始まったことを知る。2017/4/3

909. 【ウィーン訪問記】ウィーン国際空港に到着して

アムステルダム国際空港からウィーン国際空港まであつという間に到着した。いつもの旅と同様に、旅先に到着したらその場所を観光することに専念しようと思っていたため、フローニンゲンからアムステルダム国際空港へ向かう列車の中、そして、アムステルダムからウィーンに向かう飛行機の中では持参した論文を読んでいた。

今回は、オーストリアへの一週間の旅であり、荷物を最小限にしたかったため、持っていく論文や専門書は最低限のものにした。旅に出かけるのにそのようなものは必要ないだろうと言われてしま

かもしれないが、私にとってはやはり、いついかなる時も論文や専門書がそばになければ落ち着かない。それらは音楽と同じように、私の精神を安らかにしてくれる力を持っている。そうした理由以外にも、論文や専門書を今回の旅に持参しなければならなかった理由がある。

一つには、ザルツブルグで参加する非線形ダイナミクスの学会を通じて、どうしても調べたい概念や理論が出てくるであろうから、非線形ダイナミクスの専門書の中でも自分が特に気に入っている書籍を持参することにした。その専門書は、今回の学会をオーガナイズしているステファン・グアステロ教授が執筆した“Nonlinear Dynamical Systems Analysis for the Behavioral Sciences Using Real Data (2011)”というものだ。厳密には、この書籍はグアステロ教授の論文を含め、他の研究者の論文が集められて編集されている専門書だ。

この専門書は、現在の私の研究でも引用することが多く、非線形ダイナミクスを発達研究に適用している非常に優れた論文が数多く収められている。三日間の学会において、この専門書が必要になる時があるだろうと見越して、本書を持参することにした。専門書で持参したのはそれだけである。一方、論文に関しては、オーストリアから戻ってきた週に、「創造性と組織のイノベーション」のコースの最終試験が待っているため、試験対策に向けて、このコースの課題論文を持参する必要があった。コンピューター形式の筆記試験に向けて、旅の移動中にできるだけ論文を繰り返し読んでおきたいと思っていたため、今回の旅に十本ほどの論文と講義資料を持参した。

実際に、ウィーンに到着するまでの移動時間は、持参した論文を読み続け、かなり学習がはかどったように思う。私にとって、旅の目的地での活動に専念するためには、こうした移動時間に自分の学習を進めておくことが不可欠であった。まさに自分が呼吸するのと同じように、読むことと書くことが自分から片時も離れないものになりつつある。それは衝動的なものでもなんでもなく、実に自然なものである。

読むことと書くことが、いよいよ自分の存在と不可分になったことを実感したところで、飛行機がウィーン国際空港に到着した。飛行機から降りて地上に足を着けた時、ウィーンの風を感じた。それは、フローニンゲンの風よりも暖かかった。これから二日間、ウィーンの風を全身に浴びながら、この街と少しでも近い関係を築きたいと思う。

その第一歩として、これから早速、ウィーンを代表する音楽家であるモーツァルトの記念館に足を運ぼうと思う。そこで自分が何と出会うことになるのか楽しみであると同時に、楽しみの奥にある内側からの自己展開を逃さず目撃したいと思う。2017/4/3

910. 【ウィーン訪問記】モーツァルトの魂が宿る肉筆から

ウィーンに到着し、真っ先にドームガッセ5番地にあるモーツァルト記念館に向かった。モーツァルト記念館は、シューベルト記念館やベートーヴェン記念館に比べ、閉館する時間が遅いため、空港からウィーンの街に着いたその足でこの記念館を訪れる時間的な余裕があった。しかし、実際にウィーンの街に到着してみると、その街並みを眺めることに意識が向かっており、さらには、幾分道に迷ってしまったため、モーツァルト記念館に到着するのが予想よりも遅れてしまった。閉館までに二時間ほどの時間しかなく、受付で二時間でも十分に見て回れるかどうかを確認した。

受付の方曰く、オーディオガイドのプログラムも全部で一時間ほどであり、それよりもゆっくり見て回ったとしても、二時間あれば十分だ、ということであった。そのため、私は迷わずチケットを購入し、モーツァルトが1784年から1787年にかけて暮らしたこの場所に足を踏み入れた。

ここはモーツァルトが作曲活動において最も多産であった時期に生活拠点としていた場所だ。また、二つの地下の階を含めると、全部で七階にも及ぶ住居であり、モーツァルトの人生において最も贅沢に暮らしていた場所だということが伺える。

私は、オーディオガイドの音声に従いながら、展示されている資料の一つ一つに目を通して行った。あるところから、オーディオガイドの音声が邪魔になり、耳から得られる情報に集中するのではなく、全身から得られる感覚を大切にしたいと思った。

展示されている資料の中で私の関心を最も引いたのは、やはり手書きで書かれた楽譜と手紙であった。歴史的事実を示すような年表やモーツァルトに関連のある人物たちの肖像画などにはあまり関心を示すことなく、モーツァルトが実際に書き残した楽譜や文章を丹念に追っていた。私にとって、モーツァルトの肉筆は、モーツァルト自身の存在を最も近くに感じさせてくれるものだった。肉筆の持つ力というのは、改めて巨大なものがあると思わずにはいられなかった。

モーツァルトが書き残した一つ一つの音符や文字に、モーツァルト自身の魂が宿り、それはまだそこに存在しているかのようであった。肉筆に生々しさを感じることができるのは、本当にそこに書き手の魂がまだ生きているからなのではないだろうか。そのようなことを思わされた。

この記念館をゆっくりと見て回っている最中に、当然ながら様々な気づきが私にもたらされた。非常に些細なものもあれば、現段階では言葉にならないような気づきもあると言える。そうした気づき外に、純粋な感動があったのも確かだ。

私が最も感銘を受けたのは、この時期のモーツァルトは音楽を通して社会的な成功を収め、かなり派手な生活を送りながらも、毎日六枚の楽譜を書き続けていたことであった。社交界を終えて夜に帰宅し、深夜まで作曲を続け、再び朝の六時から作曲を始めたことを物語る資料が展示されていた。多くの人が集まる場所に出かけ、夜に自宅に戻ってから作曲を行い、再び早朝から作曲に取り掛かるという行為は、私には到底真似できないことだと思った。私が唯一モーツァルトと共通のものがあるとすれば、毎日何かを書き続けることだろう。

ただし、それを行うためには、私には多くのことを捧げる必要がある。決して、多くの人と交わるようなことはできないし、リズムを崩すような外出は極力避ける必要がある。

「毎日六枚の楽譜を書き続けた」という言葉が私に刺さったのは、モーツァルトという巨匠ですら、いや、巨匠であるがゆえに、毎日少しでも自分の内側にあるものを外側に表現することが不可欠なのだということを目の当たりにしたためである。モーツァルトの魂が未だに宿る肉筆を眺めながら、私の内側で何かが動き始めた。2017/4/4

911. 【ウィーン訪問記】世田谷公園とベートーヴェン記念館での体験

幸いにも、ウィーン観光の二日目も天候に恵まれた。今日は随分と色んな場所を訪れた。どこを訪れたのかを最初に明記しておく、(1)ベートーヴェン記念館(ハイリゲンシュタットの遺書の家)、(2)シューベルト記念館、(3)シグムント・フロイト博物館、(4)ベートーヴェン記念館(パスクアラティハウス)の四箇所を足を運んだ。なるべく時系列に沿いながら、今日の一日を振り返っておきたい。

そもそも今日は、シューベルト記念館とベートーヴェン記念館(パスクアラティハウス)を午前中に訪れ、午後からアルベルティーナ美術館でゆつくりと時間を過ごそうと思っていた。しかし、昨日訪れたモーツァルト記念館で入手した音楽マップを眺めてみると、私が足を運ぼうと思っていたベートーヴェン記念館以外にも、ベートーヴェンに関する記念館が他にあることに気づいたのだ。

というのも、ベートーヴェンは引っ越しの回数が多かったことでも有名であり、その音楽マップに記載があるものだけでも、合計で三箇所のベートーヴェン記念館がウィーンにある。中でも、本日最初に訪れた場所は、ベートーヴェンが二人の弟宛に遺書を書き残したことで知られている場所だ。

当時32歳であったベートーヴェンは、難聴が悪化し、日を追うごとに耳が聞こえなくなっていっていった。作曲家として聴覚を失うことに対して大きな絶望感を抱き、難聴の悪化によって他者を避けるようになったベートーヴェンは孤独感に苛まれていた。その時、二人の弟に向けて遺書を執筆していたのだ。この遺書は結局ベートーヴェンの死後に発見されたものなのだが、それほどまでにベートーヴェンは音楽家として生きること、人間として生きることに対して絶望感を抱いていたことがわかる。

昨夜、この記念館があることを知った私は、是非とも明日の早朝に真っ先に訪れたいという思いが湧き上がっていた。正直なところ、「この場所を訪れたい」という気持ちは正確ではなく、嘘である。「この場所に絶対に行かなければならない」という言葉の方が、その時の私の気持ちを正確に描写している。それはまるで、巨大な磁力がもたらすような気持ちであった。

私が宿泊しているホテルからこの記念館までは、およそ七キロほどの距離があり、歩いていくと一時間半ほどの時間がかかることがわかった。時間も距離も私にとっては一切関係がなく、必ず歩いてその場所に辿り着くということを決心して昨夜就寝した。

今朝は六時に起床し、昨日のモーツァルト記念館での体験について簡単に日記を記した。その他に書きたいことが山ほどあったが、ベートーヴェン記念館に向かうための準備をしなければならなかったため、短い文章に留めた。日記を書き終えた後に、一時間半の歩きに備えて、ホテルの朝食をしっかりと摂った。フローニンゲンでの普段の朝食は、果物しか摂らないのだが、今日はハムやチーズ、そして卵料理など、たんぱく質が多く含まれるものを多く食べた。

朝食後、ホテルを出発し、ベートーヴェンが遺書を書き残した住居に向けて出発した。ウィーンの早朝は、思っていたほど寒くなく、歩くのにちょうど良い気温であった。ウィーンの街並みを堪能しながら、私は目的地に向かって歩き続けた。私が歩いていた道は交通量が多く、それほど静かな通りではなかった。

ただし、大通りを横切る小さな通りはどれも、人通りがそれほど多くなく、静かな気配を放っていた。一時間ほど歩いてみると、徐々に辺りが静かな環境に変わっていくのがわかった。すると、ちょうど私の右手に庭園が見えた。私は、ベートーヴェン記念館に向かうことだけを考えていたのだが、このまま歩いていくと、記念館が開館するよりも随分と早く到着してしまうと思ったため、この庭園に立ち寄ろうと思った。

そのように思わせたのは、記念館に到着するのが早すぎるというよりも、実は庭園の入口に掲げられていた「Setagaya Park」という名称にあった。こんなところに日本庭園があるとは思ってもみなかったため、私は少しばかり嬉しい気持ちになった。

庭園の入口に足を一步踏み入れると、そこには日本を感じさせる和の世界が広がっていた。傾斜を持つこの庭園には、斜面の上の方から水が流れてきており、斜面の下地点に池が作られていた。池の周りには、斜面の上の方に咲く花々を写真で撮影する人たちが何人かいた。私は池を眺めながら、ここがウィーンであることを忘れさせてくれるような感覚に満たされていた。

池の周りを反時計回りに歩き始め、池に水を運んでくる溪流の上に架かっている橋に辿り着いた。溪流の流れる音に耳を澄ませていると、心が休まるという感覚をひとつ飛びにして、私の意識は一気に違う世界に引き込まれていた。それは本当に禅的な世界の何物でもなかった。私と溪流の流れと音とが一体化するような感覚を超えて、そうした感覚が一切入り込む余地のない全体感の中に私はいた。

いや、私という存在はその全体感に他ならなかった。はたから見れば、私の肉体は溪流をつなぐ橋の上にあったはずだ。だが、私の意識は肉体にはなかった。さらには、私の意識は溪流の流れや音の中にもなかった。私の意識は、一切の所在を持たない全体感に他ならなかったのだ。

私という存在が一つの全体になってからどれくらいの時間が経ったのだろうか。しばらく経つと、私は溪流の音に聞き入っている自分に気づいた。その瞬間に、自分の意識が再び肉体に宿ったことを確認することができた。日本庭園は私にとって、瞑想をする場にふさわしいというよりも、私が瞑想になる場にふさわしいのだと思った。そのようなことを思いながら庭園を一周し、出口に向かった。

その庭園には、日本の春を象徴する花々が咲き誇っており、小鳥が地面をよちよちと歩いていた。庭園を後にした私は、ベートーヴェン記念館に向けて再び歩き始めた。記念館に近づくにつれ、ベートーヴェン自身も散歩を日課にしていたことをふと思い出した。今となっては路面電車の走るこの道を、当時のベートーヴェンも歩いていたのかと思うと、少しばかり感慨深い気持ちになった。

日を追うごとに耳が聞こえてなくなっていくベートーヴェンは、どのような気持ちでこの道を歩いていたのだろうか。この道を歩きながら、どのように絶望感と孤独感と向き合っていたのだろうか。作曲家として生きること、そして、人間として生きることの意味を、この道を歩きながらどのようにして見出していったのだろうか。そのようなことを思わずにはいられなかった。

私は、自分の使命だと思う仕事を遂行するために不可欠な感覚器官が喪失した状態についてずっと考えていた。そのような状態に自分が置かれたのであれば、私は仕事をする一人の人間として、どのような意味をどのように見出していくのだろうか、そして、そのようなことができるのだろうか、ということをずっと考え続けていた。

そうしたことを考えながら歩き続けていると、目的地の周辺に到着した。ある小道を右折した瞬間に、その記念館の位置を確認することができた。そこはとても小さな記念館だった。

入り口のある二階に上り、記念館はその二階にある二つの小さな部屋だけで構成されていた。私はそこに所蔵されている一つ一つの資料を丹念に見ていた。二つ目の部屋に足を踏み入れた時、部屋の窓から見える景色に視線が釘付けになった。聴覚を失いつつあったベートーヴェンは、この窓からどのようなことを思いながら景色を見つめていたのだろうか。

その部屋に飾られていた一つの絵画作品は、この部屋にピアノが置かれ、ベートーヴェンはここで作曲を行っていたことを物語っていた。そして、その絵は、月の光がこの部屋に差し込んでいる様

子を描き出していた。ベートーヴェンは、差し込む月の光に対して、自分自身の内面の光を見つけることができたのだろうか。おそらく、ベートーヴェンにはそれができたのだろうと信じたい。

難聴がもたらした絶望感とそれがもたらした孤独感。それらを超越するような内側の光を、ベートーヴェンはこの場所で発見したのだと思う。内側の光とは、人が見出しうる最も尊い意味の結晶体なのだ、と思わずにはいられなかった。2017/4/4

912. 【ウィーン訪問記】ベートーヴェン記念館(ハイリゲンシュタットの遺書の家)での必然

—私には何も聞こえない。こんな出来事に絶望し、もう一步で自ら命を絶つところだった。芸術、これのみが私を思いとどまらせた—ルートヴィヒ・ファン・ベートーヴェン

今日は結局、20キロ近い距離を歩いていたように思う。だが一切の疲れもなく、昨日に予定していた全ての場所を訪問することができた。

ただし、ウィーンの地図を見ながら発見した「ヴィクトール・フランクル博物館」が月曜日と金曜日しか開いておらず、そこを見学できなかったことが少し残念だ。おそらくこの博物館を発見できた偶然に意味があり、そこを今日訪れることができなかったことに何らかの意味があるのだと思う。

人間の本質に、意味への意志を見出したフランクルは、私に多大な影響を与えてきた。私がフランクルに感化されたのは、彼が、意味への意志が持つ意味を絶えず探究していたことにあると思うのだ。意味を希求すること、意味を見出すこと、意味を構築することの意味、そして生きることの意味が、私の頭の片隅から離れることは無い。ウィーンを再訪した際に、この場所には必ず足を運びたいと思う。

早朝から歩きに歩き、予定していた場所を気の済むまで見学していたにもかかわらず、宿泊先のホテルに夕方四時過ぎに戻ることができた。部屋に戻ってシャワーを浴び、少しばかり仮眠をとって、今日という一日を振り返っていた。本日の最初に足を運んだベートーヴェン記念館(ハイリゲンシュタットの遺書の家)での体験が、強烈に私の中に留まり続けている。この記念館の入口に、実際にベートーヴェンが執筆した遺書の断片が掲示されていた。

記念館に入る前に、私はそれを食い入るように眺めていた。社交好きなベートーヴェンが聴覚を失って以降、彼は耳が聞こえなくなったことを隠すように生活をし、人との交流が途絶えたことを物語る文章から、ベートーヴェンの悲壮な思いが滲み出ている。

二人の弟宛に残した遺書の中で、ベートーヴェンは自らの暮らしぶりを、「どうしても避けることのできない時には日中ひっそりと外に出かけるが、まるで島流しにされたかのような生活」と表現していた。

病気が回復の方向に向かうことを期待して、ベートーヴェンはこの場所に移り住んだにもかかわらず、難聴は悪化する一方であった。当時、32歳であったベートーヴェンは自分の運命を呪い、「なぜ自分はこんなにも若くして、悟りを開かなくてはならないのか。そんなことは容易ではない」という言葉を遺書の中で残している。

記念館の入口にたたずんでいた私に聞こえてきたのは、外の世界の音ではなかった。その場にたたずむ私に聞こえてきたのは、215年前にこの場所に住んでいたベートーヴェンの悲痛な叫び声だけだった。しかし、絶望感と孤独感で満たされた闇の世界にあって、ベートーヴェンが光を見出したのは、芸術だった。いや、音楽という芸術の中にある自分の使命だった。そこにベートーヴェンは生きる意味を見出したのである。

私はそのことに、遺書の終わりの文章から気付かされたのだ。人間が見出す意味というのは、奈落の底からその人を救済する強靱な力があることを私は目の当たりにした。

ベートーヴェンは遺書の中で、一度自分を呪った運命の女神が、再び自らの命を奪いにやってくるのを知りながらも、生命の糸が断ち切られるその日まで、作曲家としてこの世界に音楽を生み出していくことを固く誓っていた。その姿勢に対して、私はもはや言葉が出なかった・・・。

私が常に、自分は何らの仕事も開始しておらず、日々の仕事に取り組む姿勢に自らの魂が完全に宿っていないことを絶えず批判しているのは、ベートーヴェンが見出したのと同じ意味を自分は掴めていなかったからなのだ。

この記念館の中庭に足を踏み入れた時、215年前のみならず、今この瞬間も、ベートーヴェンがまさに今自分が立っているこの場所に立っているのだと直感的にわかった。地面を支える両足の足の裏から、ベートーヴェンの気概と存在が自分の身体に流入するような感覚に囚われた。

中庭で昼寝をしていた二匹の黒猫が、おもむろに目を開け、私の方をじっと見つめている。私は中庭を後にし、ベートーヴェンの遺書が掲示された壁を再度通過した時に、「絶えず読み、絶えず書く」という姿勢をさらに越えていかなければならないと思った。

自分の生命の糸が切れるその瞬間まで、自分がなすべきことは、絶えず読み、絶えず書き、絶えず何かをこの世界に現出させていくこと以上の意味を持つものでなければならぬと固く誓った。狂気を飲み込み、狂気の沙汰を超える形で残りの人生を捧げたいと強く思う。

ウィーンに訪れた昨日まで、私はこの場所の存在を知らなかったのだが、私はこの場所に実際に足を運んだ。この場所に私が訪れたのは、偶然ではなく必然であった。2017/4/4

【追記】

この日の体験を今もまだ鮮明に覚えている。ベートーヴェンが遺書を書き残したこの場所で感じたこと。振り返ってみると、それは今の私に大きな影響を与えている。

あの二匹の黒猫はなぜ突然に昼寝から目覚め、私の方をじっと見ていたのか。中庭に立ち、足の裏からベートーヴェンの気概と存在が自分の内側に流れ込んできた体験は、どこかベートーヴェンが自分に憑依したかのように思えた。この体験をしたことは、そこから数日後にザルツブルグで体験した決定的な出来事と密接につながっていたのだと思う。だから私は作曲を始めたのだと思う。フローニンゲン:2018/5/4(金)10:59

913. 【ウィーン訪問記】シューベルト記念館とフロイト博物館での体験

ウィーンの街を歩きに歩いた昨日から一夜が明け、ウィーンでの三日目の朝となった。昨日は、ベートーヴェン記念館(ハイリゲンシュタットの遺書の家)を訪れた後、シューベルト記念館を訪れた。来た道に戻りながら、ベートーヴェンが歩いていたであろうこの道を、今の自分が歩いていることが不思議でならなかった。同時に、今その瞬間の私の目に映り、実際に私の足が踏みしめる物理的な

道だけではなく、ベートーヴェンが歩き続けた精神的な道の第一歩を私は踏み出したのだということを知った。

静かな住宅街から徐々に街の中心部に近づくにつれて、私がこの街で生活することは難しいように思えた。先ほどのベートーヴェン記念館があった場所とは比べものにならないほどに、ウィーンの街の中心部は喧騒で溢れていた。そのようなことを思いながら、ウィーンの街の中心部へ向かって歩いていると、シューベルト記念館に到着した。ベートーヴェン記念館とは異なり、今では人通りの多い大きな通りに面した場所にこの記念館があった。

ここもとてもこじんまりとした記念館だった。記念館に所蔵されている資料をゆっくりと眺め、若くしてこの世を去ったシューベルトについて思いを馳せていた。シューベルトも、作曲という形で絶えずこの世に何かを表現しなければ魂が休まらない人間だったのだと思う。わずか31歳という若さでこの世を去ったシューベルトは、この場所で魂の燃焼を経験していたのだと思わずにはいられなかった。

シューベルトが愛用していた眼鏡が展示されているのを見たとき、この小さな眼鏡をかけて作曲活動に打ち込んでいたシューベルトの姿がまぶたに浮かび上がってきた。昼食前の時間帯にこの記念館を訪れている者は私以外にいなかった。

シューベルトに関する資料を私は気の済むまで眺めていた。しばらくしてから受付の方に挨拶を済ませ、私はシューベルト記念館を後にした。次に向かったのは、シグムント・フロイト博物館であった。シューベルト記念館からフロイト博物館までの距離はそれほどでもなく、少し歩いたらすぐに到着することができた。結論から述べると、私はフロイト博物館で多くのことを学んだように思う。

博物館での展示資料やオーディオガイドによって、フロイトという偉大な心理学者の人柄や生涯について多くのことを知ることであり、フロイトにより惹かれるようになっていった。

フロイトも規則正しい習慣を重んじる人物であることを知った。また、午前中や午後の時間帯に行われるクライアントとのセッションを終えた後、そこでの気づきや学びを毎晩文章としてまとめていたことを知った。こうした日々の振り返りの積み重ねが、フロイトのセラピストとしての力量と精神分析家としての力量を高次元なものに導いていったのだと思う。フロイトが家族をこよなく愛し、家族と過ごす

時間を極めて大切にしていたこと、数千点に及ぶ骨董品を収集することを生き甲斐にしていたことなどが、展示されていた資料からひしひしと伝わってきた。

フロイトが生前中にBBCのインタビューに答えている貴重な音声オーディオガイドから聞こえてきた時、私は思わず館内で足を止め、近くにある椅子に腰掛けた。私は静かに目を閉じ、フロイトの肉声にじっと聞き入っていた。

館内の開放された窓から、春のウィーンの清らかな風が流れ込む。目を閉じている最中、私は少しばかり夢の世界にいたような心地がした。

人間の夢という現象を探究していたフロイトであれば、今私が感じていた夢のような意識世界をどのように捉えるのだろうか。そのようなことが気になっていた。フロイトが千を超える数の自らの夢をつぶさに観察したように、私も自分の内側の現象を絶えず観察したいと思う。そして、フロイトと同じように、観察から得られた自分の思考や感覚を絶えず書くということを忘れずに実践し続けたいと思う。フロイト博物館を訪れた私の心は、今日のウィーンの天気を象徴するかのように晴れ渡っていた。

2017/4/5

914. 【ウィーン訪問記】静寂さに宿る何か:アルベルティーナ美術館にて

—偉大な出来事は静寂さの中で起こる—ソーレン・キルケゴール

今、ウィーンからザルツブルグに向かう列車の中でこの日記を書き留めている。今朝の起床直後は雨が降っていたのだが、朝食を済ませたところで幸運にも雨が止んだ。

宿泊先のホテルのチェックアウトを済ませると、完全に雨が止んだ状態でアルベルティーナ美術館に向かうことができた。おそらく今回の訪問以降、ウィーンへはしばらく来ることはないであろうから、ウィーンの街に別れを告げる意味でも、この数日間で通ったことのない道を通りながら美術館に向かって行った。

厳かな建物やきらびやかな公園を眺めながら歩いていると、アルベルティーナ美術館に早くも到着した。この美術館に来た目的は、ピカソとモネの絵画を見たいと思ったことと、とりわけレオナルド・

ダ・ヴィンチが残したスケッチを見ておきたいと思ったからである。ピカソとモネの絵は、美術館の二階に所蔵されていた。私は、シュルレアリスムのような抽象画と印象派のような具象画という二つの極端な画風をととても好んでいる。

所蔵されているピカソの作品の中でも、『緑色の帽子をかぶった女』に対して、妙に引き込まれるものを感じていた。ピカソがこの作品の解説の中で言うように、私たちが世界をこのように眺めることは可能であり、その眺め方もまたリアルであると手に取るようにわかった。

日常の意識を通じた世界の眺め方だけがリアルだと思っては決してならない。それは世界を眺めるほんの一握りの方法でしかなく、実はその方法はリアリティの本質を往々にして掴めないのだ。

私はしばらく、ピカソがこの世界を見通していたのと同じ方法で世界を眺めるように努めていた。我に返ったところで、この作品に引き込まれるようなものを感じていた理由がわかったような気がした。一つには、この作品が通常とは異なるリアリティの世界を指し示しているということである。二つ目として、この作品が非日常的なリアリティを示すのみならず、その世界を眺めるための方法を指示していることだった。

つまり、この絵画作品を通じて鑑賞者は、通常とは異なるリアリティの世界を目の当たりにするのみならず、非日常的リアリティを眺めるための新たな眼を獲得するような促しを得るのだ。おそらく所蔵されているその他のピカソの作品も素晴らしいものがあっただろうが、最も印象に残っているのはこの作品を見たときの体験だった。

モネの作品とダ・ヴィンチのスケッチに関しても、私は食い入るように眺めていた。そこで得られた感覚というのは、静かに私の内側に流れ込んでいき、しばらくその場から離れることを禁じさせた。ただし、そこでの感覚に対して、何らかの言葉を与えることは今の私にはできない。それらの作品の前で立ち止まらざるをえなかったことだけが、確かな事実として私の内側に刻み込まれている。

今回、ダ・ヴィンチにせよ、モネやピカソにせよ、そうした偉大な画家たちの作品に反応する自分がただけではなく、美術館を訪れる醍醐味の一つである、これまで一切知らなかった画家に感化されるということを今回も経験した。一人は、フランティセク・クプカという画家である。彼が残した二つ

の作品を見たとき、これらの作品には何か重要な意味が込められていると直感的に即座にわかった。

それは言葉よりも早くやってくる光のような直感だった。作品を一瞥した後、解説文に目を通してみると、自分がこれらの作品を重要だとみなした意味がわかった。一つの作品は、「上昇」をテーマとし、聖なる建造物をシンボルとして用いながら、意識の上昇過程が描かれているとわかった。また、もう一方の作品は、密教的な発想に裏打ちされており、通常の眼には見えない偉大な創造の力を可視化していることがわかった。クプカは幼少の頃から密教に強い関心を持っていらしく、その素養と才能が色濃くこれらの作品に表れていた。これらの作品は、アルベルティーナ美術館を訪れた私にとって忘れられないものとなった。

最後にもう一人、私に大きな影響をもたらした画家について言及しておきたい。その画家は、エドゥアルド・アンジェリー (Eduard Angeli) と言う。彼はウィーン生まれの画家であり、現在も画家としての活動を続けている。彼の一連の作品が、エキシビションとして地下一階に大体的に取り上げられていた。最初にエキシビションの入り口に足を踏み入れた時、作品の良さが一瞬ではわからなかった。だが、彼の作品を幾つか眺めているうちに、彼が表現しようとしている大きなテーマが次第に伝わってきた。端的に述べると、それは「静寂さの偉大さと尊さ」であると私は受け取った。

彼の作品は、間違いなく静寂さを描いていた。しかも、静寂さを静的に描くのではなく、全ての現象がそこで起こりうるような形で動的に描いていたのだ。最初、彼の一連の作品を眺めながら妙に静寂さに浸る自分が不思議であった。だが、それこそが彼の作品が持つ力なのだと察知した。

彼の作品から、私が普段の生活の中で静寂さを何よりも大切にしている理由を教えてもらったような気がした。静寂さの中から全てが起こりうるのだ。喧騒からは自分が大切にすることは決して生まれない。そのようなことを確信させてくれたのが彼の作品だった。静けさの中には何かが宿り、静けさを通じてその何かがこの世界に姿を表すのだ、と思わずにはいられなかった。

アルベルティーナ美術館での体験を思い返していると、ザルツブルグまで後一時間ほどとなった。いよいよモーツァルトが生誕した土地に私は降り立つことになる。2017/4/5

ザルツブルグに到着するまでに、もう一つだけ書き留めておきたいことがある。それは、昨日の最後に訪れた「ベートーヴェン記念館 (パスクアラティハウス)」についてである。この記念館は、ウィーンの街のほぼ中心に位置しており、ベートーヴェンが何年間にわたってここで生活をしていたそうだ。ベートーヴェンはこの場所で生活をする中で、オペラ曲「フィデリオ」やピアノ曲「エリーゼのために」などを作曲した。

この記念館は、昨日の最初に訪れた「ハイリゲンシュタットの遺書の家」よりも、街の中心部に近い場所たたずんでおり、二つの記念館の周囲の環境は非常に対照的であった。記念館の入口から建物の中に入ると、螺旋階段が見えた。同時に、一人の老女が階段を上ろうとしている姿が見えた。その老女は、笑顔を交えながら、先に行くように私に合図をした。

彼女に挨拶をし、その合図に従い、階段の行く先を眺めると、階段が螺旋状に長く続いていることがわかった。なぜその老女が私に先に行くように合図をしたのかがわかった。階段の傾斜が急な上に、その距離が想像以上にあるからであった。ようやく四階の受付に到着した際に、ベートーヴェンはこの階段を毎日上り下りしていたのかと思わずにはいられなかった。

記念館の中で真っ先に目に入ったのは、ベートーヴェンが弾いていたであろうピアノだった。このピアノを弾きながら、この場所でベートーヴェンは数々の曲を作り上げていったことが、その場の雰囲気からすぐさまわかった。四階の窓からは、当時も存在していたであろうウィーン大学の姿を眺めることができた。所蔵されている資料をゆっくりと閲覧した後、私は静かに記念館を後にした。

そういえばふと、ハイリゲンシュタットの遺書の家にも、シューベルト記念館にも、記念館に置かれている署名用のノートに目を通すと、日本人がほぼ毎日のようにそれらの記念館に訪れていることがわかった。一方、フロイト博物館に関しては、日本人はほとんど訪れていないことが署名用のノートからわかった。それらのノートを見ながら、私の中には、音楽的なものや心理学的なもの、そして哲学的なものが、ごたまぜの形で放り込まれていることに気づかされた。

そこには「人間の探究」という一つのテーマがありながらも、現在の私の内側に存在する様々なものが一つのまとまった形として姿を表すには、さらに多くの時間が必要なのだろう。ウィーンに向けた

飛行機の中で読んでいた創造性に関する論文に触発される形で、私は自分が探究していこうと思っている領域を改めて書き出していたことを思い出した。決して探究項目を細分化するのではなく、極めて抽象的な学問領域として書き出したにもかかわらず、その数は七つほどに及んでいた。自分が専門として探究する領域は一つではなく、現時点での段階では、少なくとも七つあることが自ずと理解できた。

それら七つの領域のそれぞれに対して、一つの領域を一生涯かけて探究した場合の深度と同じ地点に到達できるようにしたい。ベートーヴェンが毎日この家の階段を上ったように、私も自分の探究領域が持つ階段を一段一段登りたいと思う。

パスクアラティハウスから宿泊先のホテルに向けて戻る道中、私の頭の中はそのような思いで一杯だった。列車の車窓から景色を眺めると、先ほどまでの田園風景が少しばかり姿を変えた。目に入る住居の数が多くなり、町の姿を持った景色が広がっている。ザルツブルグまで後20分ほどになった。2017/4/5

916. 【ザルツブルグ訪問記】モーツァルトの生誕地ザルツブルグに到着して

ウィーンから三時間弱の時間ほど列車に揺られ、ザルツブルグに到着した。列車がザルツブルグ駅に到着する少し前から、小高い山の上にあるホーエンザルツブルク城が見えた。また、その遙か先にはアルプスの山々を眺めることができた。山頂が雪で白く輝いていた。

予定よりも幾分早くザルツブルグに到着したため、ホテルのチェックインを済ませてから休憩をとることなしに、すぐさま街へ散策に出かけた。まずは、ホテルから歩いて近くにある明日の学会の会場を下見に行った。非線形ダイナミクスに関する明日の学会は、ザルツブルグ大学の医学部がある建物で行われる。学会は明日の朝九時から開始されるため、当日の朝に慌てないためにも建物の場所を確認しておいた。

ホテルから会場までは、歩いて10分ほどの距離であり、ザルツァハ川という大きな川の上を架けている橋を渡ってすぐのところに会場があった。ザルツブルグの街並みは、ウィーンに比べて自然も多く、私にとってはザルツブルグの方が心が落ち着く。ただし、この街も意外と車の数が多く、街の中心部は少しばかり騒がしい。

私がこれまで訪れた世界の街の数などたかが知れているが、街の安全度に対して、これまでの経験で培われた嗅覚のようなものが私には備わっているように思う。駅から少し歩いてみて気づいたが、物乞いの姿が辺りに散見され、安全だと明確に言えないような雰囲気が漂っていた。実際に、私の身体の外膜には警戒心のオーラが張り巡らされたままであった。

そのような警戒心を持ちながら、ザルツブルグの街を歩いていた。ただし、ザルツァハ川沿いにあるウォーキングロードはとても心地が良かった。遠くにアルプスの山々を眺めながら歩いている時は、ザルツブルグの魅力を実感した。その足で、モーツァルトが生誕した場所を訪れた。

残念ながら、今ではもうその辺りは完全に観光地と化してしまい、現代風の店が並び、人も多かった。とりあえずモーツァルトが生まれた建物の外観だけを眺め、オランダに戻る前日に建物の中を見学しようと思う。

モーツァルトの生誕地を確認し、私は再びザルツブルグの街中を歩き出した。もう一度、ザルツァハ川の上を架ける橋を渡り、ザルツブルク・モーツァルテウム大学という音楽大学へ足を運んだ。ヘルベルト・フォン・カラヤンなどを卒業生に擁しているこの大学は、世界的にも有名な音楽大学だということを知っている。私は世界の主要都市を訪れた際には、時間があれば必ず、その都市を代表する大学に足を運ぶことにしている。

私は決してモーツァルテウム大学の学生ではないが、学生を装って建物の中に入ってみた。私が入った建物は、外観から内装までとても綺麗であり、中は非常に開放的であった。一階に図書館があり、上の階では、ガラス張りの窓を通じて、ある生徒が一人の教授からピアノの指導を受けている様子が伺えた。音楽を探究する上では、この大学、そして、ザルツブルグという街は非常に恵まれた環境なのだろうと思った。

大学を後にし、ホテルの近くあるアジア料理店で夕食を摂り、ホテルに早めに戻りゆっくりすることにした。明日からの学会が今からとても楽しみだ。2017/4/5

ザルツブルグに到着してからの二日目の朝。今朝はとても良い目覚めであった。疲労感なども特になく、今日からの学会に集中して参加できそうな心身状態だ。今回の旅行の過程で、自分の中で考えを深めておきたいテーマがあれこれと湧き上がっている。それら一つ一つとゆっくりと向き合いたいのだが、旅行中はどうしても時間を取ることができない。そのため、旅から帰ってきた後に、自分のノートやメモなどを見返しながら、書くことを通じて考えを深めていきたい、ということを今書き残しておきたいと思う。

もはや、書くことなしに考えを深めることなどできないという思いに私は絶えず満たされている。書きながら考え、考えながら書くという生き方を貫いていきたい。

今日は、早朝から小雨が降っている。ザルツブルグでの宿泊先は、大通りに面しているにもかかわらず、ウィーンの宿泊先に比べて静かだ。

昨日思わず笑いがこみ上げてきたのだが、今の宿泊先のホテルの廊下には、この街が生んだ巨匠ヴォルフガング・アマデウス・モーツァルトの肖像画や写真が多く飾られている。さらには、私の部屋の壁にもモーツァルトが小さく微笑む大きな肖像画が飾られている。起床直後、ベッドから起き上がって電気をつけたらモーツァルトがそこにいた、ということに可笑しくなってしまったのだ。この街にとって、それほどまでにモーツァルトは大切な人物なのだろう。

昨日、ザルツブルグの街を横切る大きな運河であるザルツァハ川の上を架ける橋を渡ったとき、人間の発達において私が見落としていたある重要なことに気づいた。それは文化的な体験というものであった。

モーツァルトが幼少時代から音楽旅行と称して欧州各地を旅していたことは有名な話である。モーツァルト自身が語るように、欧州各地を旅することによって得られた文化的体験が、彼の演奏技術を高めることにつながっただけではなく、創出する音楽の質を絶えず深めていったのだと思う。私はこれまで、文化的体験というものが、探究活動をより豊穡なものにすることを見逃していたように思う。探究活動を深めていく過程で、人は往々にして内面の成熟を遂げていくことになるが、その時に文化的体験というのは人格を陶冶する上でも大きな意味を持つ。

文化的体験が内面性を深めていくことは、何も目新しいことではなく、よく耳にする話である。しかし、ザルツァハ川の上を架ける橋を渡った瞬間に掴み取ったのは、文化的体験というものが、自分の内側の成熟にとって極めて重要なのだという自覚だった。つまりこれまでは、文化的体験というものが人間の発達において大きな鍵を握ることを頭で理解していながらも、それが自分の実際の経験と結びつくことはなかったということである。私はザルツァハ川の橋の上で立ち止まり、アルプス山脈を背景にして流れる運河をぼんやりと眺めていた。

すると私の意識は、三年前に住んでいたカリフォルニアのアーバインの記憶に飛んでいた。雲ひとつない燦然と輝く太陽のもと、カリフォルニア大学アーバイン校の図書館に向かって歩いている自分の姿が思い出された。その時もたわいのないことを考えながら歩いていたのを記憶している。最も印象に残っているのは、大学図書館に向かいながらふと、宇宙旅行に出かけてみたいと思ったことだった。

図書館に到着後、宇宙旅行の可能性について調べていると、民間人でも宇宙旅行が可能であることがわかったのだ。ただし、その費用は日本円にして数千万円ほどであり、宇宙空間に数分間だけ留まってスペースシャトルの窓から景色を眺めるというものだった。地球を離れて宇宙に滞在できる時間がごくわずかであり、なおかつ旅費が高額だ。私は即座に、そうした条件であれば、自分一人では宇宙旅行に出かけることはないだろうと思った。

だが、仮に自分に子供がいて、自分の子供が宇宙旅行に出かけたいと言ったら、話は全く別だと思ったのだ。そのように思わせたのは、私の両親が自分に対して提供してくれた数々の文化的体験だった。

私が幼少の頃から、両親は連休や長期的な休みの際には、必ず私を連れて日本各地を旅行することを習慣にしていた。幼少ながらも、その時の旅の記憶というのは断片的に残っている。東京に住んでいた時は、東京から行ける範囲の県を色々と旅をし、山口県に引っ越してからは、四国・中国・九州地方を旅して回った記憶が鮮明に残っている。今でも一つ忘れられない思い出として残っているが、小学校四年生の時、連休を活用して九州のとある県を訪れた時のことだ。

何が最も印象に残っているのかというと、父の連休と私の学校が始まる日が合わず、学校を休む形で私は旅行することになったことである。なぜだか、私が学校を休んで旅行に出かけたことが担任の先生に知られてしまい、学校に戻ってきた初日に私は一人居残りをさせられて、休んだ日の宿題が終わるまで帰ることを許されなかったことを強く覚えている。

当時の私は学校がとても好きであり、旅行を理由に学校を休みたくなかったし、なぜ自分が居残って勉強をさせられなければならないのかも理不尽に思っていた。今となっては、居残りに付き合い、休んだ分の宿題を一对一で見てくれていた担任の先生の熱意には感謝しなければならないだろう。私が学校の先生であれば、果たしてそのような親身な教育ができるだろうか、と考えさせられる。その時の私は、居残りを命じた先生に対して、怒りを表すような態度を静かに取っており、家に戻ってから、学校を休ませて旅に連れて行った両親に対しても同じような態度を示した。

この件があってから、両親は二度と学校を休ませて私を旅に連れて行くことはなくなった。だが、学校を休ませてでも、子供を連れて旅をし、子供に文化的体験を積ませるという両親の姿勢には、今となってはとても共感ができる。もし私に子供がいたら、一日と言わず、一週間、あるいは一ヶ月ぐらい学校を休ませてでも旅に連れて行く可能性があると思ったのだ。旅の経験は、長大な時間を経た後に、その経験が持つ真の意味がいつか何かのきっかけで開かれる。

旅が持つ真の意味は、短期的にはすぐに姿を現さない。それは、長い年月をかけた後に、ふとした瞬間に現れるものなのだ。両親が連れて行ってくれた旅の経験は、数十年の歳月を経て、それらが私にもたらす真の意味が今になってようやく開かれつつある、という確かな実感が今の私にはある。あの頃の旅の経験がなければ、今の私はないだろう。

旅を通じた文化的体験というのは、長大な時間にさらされることを通じて、それが持つ真の意味が開かれ、人間の発達に多大な影響を及ぼすのだと思わされた。旅の持つ意味や意義については、今後も考えていかなければならないだろう。それほどまでに旅がもたらす体験や経験というのは奥が深いのだ。2017/4/6

【追記】

この日記を読み返しながら、改めて自己という存在が文化的な産物であり、世界各地の文化の恩恵によって成立しているのだと実感する。おそらく私はこれからも世界各地を旅することになるだろう。そうした旅の経験が自己をより深い存在に変容させていき、より深い生の実現を促していくのだと思わずにはいられない。フローニンゲン:2018/5/4(金) 12:30

918. 【ザルツブルグ訪問記】シナジェティクスの提唱者ハーマン・ハーケン教授との出会い

ザルツブルグで開催されている非線形ダイナミクスに関する学会の二日目が終了した。初日の学会後、主催者の厚意によって、学会の参加者は演奏会とディナーに招待された。ディナーでの話が盛り上がり、ホテルに帰宅する時間が遅くなってしまった都合上、初日の学会を振り返る余裕が昨夜はなかった。記憶が残っているうちに、昨日の学会について書き留めておきたい。

初日の学会において最も印象的だったのは、最初の発表であった。私はこの学会に参加するまで気づかなかったのだが、最初のプレゼンターはなんと、シナジェティクスの提唱者の一人である理論物理学者のハーマン・ハーケン教授だった。

私が複雑性科学の領域を探究し始めて以降、何度かシナジェティクスという言葉に出会ってきており、またハーケン教授の名前も聞いたことがあった。まさか今回の学会でお目にかかることができるとは思ってもおらず、ハーケン教授が登壇された時には純粋に驚いた。

ハーケン教授は、現在90歳を迎えていながらも、依然として思考が明晰であり、発表の最中、終始一貫して私はハーケン教授の熟成された知性を感じていた。質疑応答を含め、一時間ほどの発表であったが、私は静かな感動に包まれていた。絶え間ぬ探究を続けた知性というのは、このような特性を持つのだ、ということを改めて強く実感していた。ハーケン教授が発表を終え、休憩時間に入った時、私はハーケン教授に挨拶に行った。

私がハーケン教授に質問したことは二つあるが、あえてそれらをここで書き留めることはしない。ハーケン教授とのやりとりの内容が重要なのではなく、偉大な知性から私が感覚的に何を受け取ったのかということの方が遥かに重要である。ハーケン教授から伝授されたのは、決して表面的な知識で

はなく、知識を創出するためのエネルギーや探究者としてのあり方のようなものであったように思う。私は駆け出しの研究者に過ぎないが、そうした研究者にとって何よりも大切なのは、偉大な研究者から創造エネルギーのようなものを受け取り、それを自らの創造性に変容させていくことだと思う。

ハーケン教授と少しばかり雑談する幸運に恵まれ、ハーケン教授は学会のために何度か日本に訪れたことがあるとのことであり、優しい笑みを浮かべながら幾つかの日本語を話してくれた。ハーケン教授と日本との縁は学会のみならず、シナジェティクスに関するハーケン教授の何冊かの著作が日本語に翻訳されていることからわかる。

ハーケン教授はドイツ人であるが、英語の原著が多数あるため、私にとっては非常に有り難い。オランダに戻ったら、自分の関心事項と合致している、“Information and Self-Organization: A Macroscopic Approach to Complex Systems (2006)”をすぐに購入したいと思う。ハーケン教授との出会いについては、うまく言葉にならない。この出会いが私にもたらした意味は、後々になって初めて分かるものなのだろう。この世界において、人との出会いというのは何て不思議なことなのだろうか。2017/4/7

【追記】

シナジェティクスの創始者の一人である理論物理学者のハーマン・ハーケン教授に出会ってから一年が経った。この日記で書かれているように、ハーケン教授との出会いがもたらす意味は今もなお徐々に明らかになっている最中であり、完全にその意味が開かれているとは言えない。それほどまでに何か大切なものがハーケン教授との出会いにはあった。

この日記で指摘しているように、偉大な探究者や実践者から創造エネルギーのようなものが伝授されるというのは疑いようのないこととして知覚される。私はこれまで、発達科学の領域に限ってみれば、本当に多くの優れた研究者と直接会って話をする幸運に恵まれてきた。中には、何年にもわたって直接指導を受けさせていただいていた方もいる。そうした経験を振り返ってみると、直接的な関係からもたらされる創造エネルギーの授受というのは本当に見逃すことのできないものだと思う。発達を促すものとは、本質的にはこうした創造エネルギーなのではないかと思わされるほどだ。フローニンゲン:2018/5/4(金)13:28

ザルツブルグでの学会における初日の発表が全て終了した後、学会の参加者は演奏会に招待された。会場はザルツブルグ大学の歴史ある図書館であった。学会の主催者とともに、私たちは学会会場を後にし、歩いて目的地に向かった。私たちはアルプス山脈を遠目に眺めながら、ザルツァハ川沿いを歩いていた。

夕日が落ちる前の時間帯であり、辺りはまだ明るかった。ザルツブルグの市内には交通量の多い通りが幾つかあるが、そうした通りを歩いていると、ザルツブルグの良さが一向に見えてこなかった。だが、雄大な自然をゆっくりと堪能できるような場所では、ザルツブルグが持つ真の豊かさを実感することができる。道中私は、老齡のデンマーク人の教授と親しくなった。

その方の関心領域は、認知的発達であり、私と共通のものであった。また、その方がヴィゴツキーをはじめとしたロシアの発達論者から多大な影響を受け、ジェームズ・ギブソンの生態心理学と複雑性科学の知見を統合させるような試みをしていることも分かった。デンマークにおける発達研究についてあれこれ質問をしてみると、デンマークにおいては戦後、ヴィゴツキーを筆頭としたロシアの発達心理学を積極的に取り入れるような動きがあったそうだ。現在でもその影響が色濃く残っているらしい。

その教授のように、デンマーク国内において、認知的発達研究に複雑性科学の知見を取り入れている研究者はほとんどいないとのことである。また、認知的発達をどうしても脳科学の知見からだけを持ってして捉えてしまうという傾向がデンマークにあるらしく、それは日本でも同じであるし、他の国にも当てはまることだと思った。

当然ながら、脳科学の発展は認知的発達研究に多大な貢献を果たしている。ただし、主観的な現象で満ちた認知的発達現象を物理的な脳の観点からだけを持ってしてアプローチするのは、どうしても限界があるのだ。その方とは終始、認知的発達に関する話をしており、ロシアの発達論者を含め、発達研究に多大な功績を残した幾人かの研究者の中で、私が知らない人物について色々と教えを受けていた。その方の話にもあったように、人間の脳や身体運動に関する現象に対しては、随

分と前から複雑性科学の知見が取り入れられている。しかし、心や知性といった主観的な現象に対して、複雑性科学の知見を取り入れようとしている研究者は今でもそれほど多くない。

今回の学会には、複雑性科学の知見を教育の分野に応用する研究を行っている研究者が何名かいた。特に、夕食を共にしたギリシア人のディトリオス・スタモフラス教授は、複雑性科学の知見を教育の分野に適用することに関して、その道の牽引役を担っている。スタモフラス教授に話を聞くと、ギリシャにおいても事情は同じであり、教育の分野に複雑性科学の知見を取り入れている研究者は一握りだそうだ。現在の私も複雑性科学の理論と手法を教育研究に適用しているため、スタモフラス教授との話也大いに盛り上がった。話を続けているうちに、スタモフラス教授の名前をどこかで見たような気がしていた。

すると、少し前に注目していた書籍“Complex Dynamical Systems in Education (2016)”の著者の一人であることを思い出した。ハーマン・ハーケン教授との出会いに引き続き、スタモフラス教授との出会いもまた偶然であった。

複雑性科学の知見を社会科学に適用することを趣旨にした国際学会はそれほど多くないため、この学会には、各分野の重鎮が何人も参加している印象を私に与えた。この学会は二年に一回開かれるものであり、次回の学会にも必ず参加したいと思う。2017/4/8

920.【ザルツブルグ訪問記】アルプス山脈を越え、太陽を超えて

怖いほどに、驚くほどに、奇妙なほどに内側から言葉が出てこない。

ザルツブルグでの非線形ダイナミクスに関する国際会議が先ほど終了した。三日間に及ぶ学会を通じて、研究分野やテーマは異なれど、非線形ダイナミクスに関して志を同じくする多くの研究者と知り合うことができた。若い研究者はごく少数であったが、それでも何人かの若手の研究者とも交流することができ、同時に、70歳を超えるような熟練の研究者の方たちとも交流を持つことができた。

やはり科学研究というのは、このような科学者同士の交流によって進展していくのだろうと改めて思った。それにしても、今の私は奇妙なほどに、自分の言葉を生み出すことができない。それはおそらく、ウィーンの旅から始まる今回の学会において、非常に密度の濃い経験が自分にぶつかってきた

からだろうと思う。学会の最後に、一人の参加者からコメントがあったように、今回の学会での発表内容や発表外でのコミュニケーションから得られたものを咀嚼するには、随分と時間がかかるという予感がしている。

自分の言葉が出てこないほどに経験が堆積するというのは、滅多に出くわす出来事ではない。私の研究をさらに先に推し進めてくれるような数多くの観点、概念、理論、方法と遭遇したのは間違いない。だが、重要なことは、そうした経験の表層に浮かぶ事柄ではなく、一人の探究者としてのあり方を含めた、経験の最も根幹に関わるものだと思っている。今回の学会を通じて、私は間違いなく、そうした根幹と接触する機会を得た。

そして、探究者としての根幹に関わるそれが、これから熟成に向けた歩みを始めるのだと予感している。だからこそ、今の私は言葉を失っているのだ。それが自己の存在の奥深くの事柄と強く結びついているがゆえに、安易に言葉の形として表すことができないのだ。正直なところ、とんでもないものと触れてしまった、という思いで満たされている。あるいは、とんでもないものが自分の中にこれまで眠っており、ようやくそれが目覚めようとしているという感覚なのだ。様々な意味において、もはや自分は後戻りできないということを知っている。

それに関しては、随分と前に腹を括っていたように思う。ある時から少しずつ感じ始めていたことが、静寂さの中に全てが宿るというような感覚が自分の内側で大きな位置を占め始めている。自分が外側の世界における静寂さを求め、内側の静寂さに何かが潜んでいるという感覚は正しいものだったのだ、と今改めて実感する。外側の世界にせよ、内側の世界にせよ、喧騒の種類は多様だ。

だが、外側と内側の世界における静寂さは、一つの究極的なものと繋がりをいう意味で一つだ。静寂さは、一者の世界に参入するための扉である。もはや私はためらうことなく、この扉を開けたいと思う。向こうの世界にひとたび足を踏み入れると、もはや戻ってこれなくなるかもしれない。それでも扉を開け、そちらの世界に参入することに腹をくくったのだ。米国での生活を通じて芽生えたこの感覚、そして欧州での生活を通じて開花しつつあるこの感覚に私は従いたい。

あちらの世界を通じてこちらの世界で生きること。それは私が断固として譲ることのできない生き方だ。学会が終わり、ザルツァハ川を架ける橋を渡りながら、私はそのようなことを考えていた。一昨日

や昨日と打って変わり、とても暖かい太陽光がザルツブルグの街を包んでいた。その優しい温かさを感じながら、私の内側にある熱情は太陽を遥かに凌ぐものであることがわかった。太陽を見上げ、右手に目をやると、雪解けを待つ雄大なアルプス山脈が輝いて見えた。堂々たる様子でそこにたたずむアルプス山脈を眺めながら、私の内側にある志はアルプス山脈を遥かに凌ぐほどの不動さを持っていることがわかった。

今後、内側の表層部分において小さな迷いが生じたとしても、私の根幹部分にはもはや迷いが生じることは一切ないと言えるだろう。この地球上に雲が生じることはあっても、宇宙上に雲が生じないのと全く同じだ。あちらの世界を通じてこちらの世界で生きるという明確な意志は、私を根幹から突き動かす、何にも代えがたいものなのだ。2017/4/8